



INVITATION

山梨大学教育人間科学部

第22号

November. 28, 2007

2007年度 後期FDウィーク授業公開のお知らせ

教員や学生の皆様、後期FDウィーク授業公開（2コマ）には是非ご参加ください。

第1回公開授業

12月13日（木曜日） 1時限（8：45～10：15）

「健康科学」共通科目・テーマ別教養科目「人間の生命と健康」（科目番号：063605）

教室：N-24

履修学部・コース：全学生対象

授業担当者： 福永 茂先生（保健体育講座）

概要：私の授業にはこれといった特徴はありません。また、授業方法も上手ではありません。パワーポイントを使うわけでもなく、配布した資料を基に説明を加えるだけの平板な授業です。課題についてそばに座っている者で話し合いをさせることもあります。気が乗らない者はやりません。学生が評価しているのは、教材が身近で己に関わる「健康」であるからでしょう。また、配布資料が多いこともノートを取らなくてよいという面から都合がよいのかもしれませんがね。

第2回公開授業

12月21日（金曜日） 2時限（10：30～12：00）

「古典文学演習ⅡA」専門科目（科目番号：162010A）

教室：K427

履修学部・コース：教育人間科学部 国語教育専修

授業担当者： 池田 尚隆先生（国際文化講座）

概要：『源氏物語』の演習です。今期は学生の希望により「紅葉賀」巻を読んでいます。発表者に加え、司会も学生が担当します。したがって授業担当者は適宜アドバイスするという立場です。担当した本文の音読から、異文の検討、諸注を参照しながらの解釈と進みます。受講者は9名です。『源氏物語』は書かれて千年、研究が始まって八百年たちます。まずはその重みをきちんと受け止めることが大切であると考えており、とくに新しい試みはしておりません。何百年と続く勉強の仕方が、逆に先生方の御参考になることもあるかと思ひ、お引き受けした次第です。

2007 年度 前期 F D ウィーク 授業公開のご報告

前期第 1 回 学部 FD 公開授業に参加して

(英語教育講座 古家 貴雄)

本年度第 1 回の FD ウィークは、7 月が行われ、好評の内に終了しました。その第 1 回目の授業公開は、火曜日 2 時限の国際文化講座の森田秀二先生による「フランス語初級 I」の授業でした。この授業は共通外国語の科目で、フランス語の初級の能力をつけるためのものでした。なお、履修対象者は工学部・医学部看護コースの 1 年生でした。この授業の特徴は、「習うより、慣れろ」という外国語学習の鉄則を守りながら、発音の練習時間の十分な確保とクラスゲームを用いたパターン・プラクティスを導入しながらの基本的な文法体得にあるということです。当日の授業は、数週間後に行われるオーラルの試験のための文型練習とその説明が主でした。プリントを使いながらプリントに沿って文型や表現を説明しながら、実際の場面に引き付けて運用練習も行っていました。受講学生全員がとても授業に集中していることが印象的で、担当の森田先生もフランス語を自由に駆使しながら、肉声で文型の練習をさせ、それに学生がよくついていっていました。

FD ウィーク公開授業 (その 1) : 「フランス語初級 I」 7 月 3 日 (火) 2 限目 [授業者の思い] 教師、学習者双方を追い込む語学学習の重要性: 森田 秀二 (国際文化講座)

私は元々無免許でこの稼業をやっているのですが、同僚を前にしての公開授業というのは初めての体験であった。公開したのは工学部 1 年生を対象としたフランス語初級クラス。問答によるインフォメーションギャップ・ゲームがこの日の目標である。予め学生には課題として複数の有名人について紹介文を書かせておいた。ゲームは同じ材料を問答形式にしたもので、この日にゲーム練習が首尾良く終われば、翌週にはこれを用いたペア毎のオーラル試験があることを予告しておいた。ゲームに必要な練習量をその日の時間内に何とか確保するという意気込みで臨んだが、これは無理であることが途中でわかり、試験は翌々週に延期と相成った。

近いところに目標を設定しそれに向けて教える側も自らを追い込み、学習者も巻き込むという短期決戦型が私はけっこう好きである。エドガー・アラン・ポオは短編小説の書き方について、結末をまず考えてから執筆せよと言った。レンガを積み上げて家を完成するより、中国人のように(骨組みを組んだうえで)屋根から始める方が賢明だとも書いている。私は初・中級用の語学授業も短編小説型だと信じている。少なくとも理念的には... 実際は、この日の授業ではからずも露呈したように設計変更がしょっちゅうであるが。

[授業参加者の感想] 教員・学生アンケートの結果

- ・思っていたよりも多くの学生が、仏語に取り組んでいて頼もしく思えた。日本にいながら、大学の科目として仏語を学べる機会があることが素晴らしいと再認識した。
- ・多くの学生が、声は小さいけれど、音声にして先生の後について繰り返していた。仏語への知的な憧れを学生たちがちゃんと持っていて、嫌々学習しているという感じではなかった。
- ・森田先生の発音が、当然ながら、美しく、魅かれた。
- ・教師と学生とのやり取りがメインになっていて、入っていきやすいと思った。
- ・90分の中に、国名、国籍名、時計、数字、動詞の活用、冠詞などを入れつつ、何度か教師からの問いに答える場面を入れ、応用できる点はよいと思った。
- ・音読・プロナウンスと板書・カード(人名)、小テストを効果的に組み合わせることで参加意欲を積極的に喚起している点が参考になった。
- ・“本番”の前に、“確認”と“練習”の機会が与えられ、さりげなくポイントを意識させていた。
- ・仏語は発音も難しいので、学生の声がもう少し出るとよかったと思う。学生に自信がなかったのかもしれないが。
- ・もう少し授業のスピードをゆっくりと行ってもよかったのではないかなと思う。

手塚先生の授業では、まず学生が自ら参加したい気持ちになるようにという工夫を心がけており、指導方法に沿った下準備も万端という感じです。「アンサンブル」は数学用語としては「集合」で、共通の特徴をキーとした集まりです。“音楽的にいえば、主張するところは主張するけれども相互に気配りをする事がアンサンブルの真髄である。アンサンブルの精神を日常生活の中でも忘れてはいけない。”そんな言葉も含めて、教員を志望する学生への授業では、「その学生を通して教育を受けることになる子どもたちを思い、学生には折に触れて様々な”覚悟”を意識させる。」という姿勢に立った手塚先生の学生への語りかけが印象的でした。FDの効果として、テクニカルなことだけではなく、実際に立ち会ってみないとわからない側面を経験できました。

FD ウィーク公開授業（その2）：「音楽科内容論」 7月27日（金）4限目

【授業者の思い】 音楽のもつ力＝楽しさを実感させる：手塚 実（音楽教育講座）

本年7月28日、学部FD委員会からの要請を受け、来年還暦を迎える歳になって初めての経験となる公開授業を行いました。授業科目は「音楽科内容論」、履修者は19名。この授業を履修する学生の大半は音楽的な知識や技術を持っていません。私の今までの経験から、学生の中には子どもの頃受けた音楽の授業あるいは音楽の教師によって受けた心の傷がある種のトラウマとなったまま現在の至っている者がいます。本授業ではそのことに配慮して授業を進めています。そのために「できる・できない」を問うことは極力避けています。音楽的な知識を学びながら、それを生かした音楽表現を

学生に体験させつつ音楽のもつ力＝楽しさを実感させることにより、少しでもトラウマから解放させることができればこの授業の目的の半分は達成したと考えています。公開授業当日は、比較的音楽の得意な学生数名が集中講義と重なり欠席せざるを得ない状況でしたが、出席した学生の積極的な授業参加により無事90分が過ぎました。公開授業を終えて頭をよぎったことについて述べます。私が育った



大学では公開レッスンはあるものの、指導に当たる者はその道の一流だけに許されるものでした。果たして自分の授業は公開するに値したものであったのだろうか……。この疑問と反省は今でも続いています。この反省こそが授業を公開する目的のひとつであることは承知しています。今回の反省を基にこれからの授業を考え直していきたいと思っております。一方で、こういうことで学生の何が変化するのだろうかという疑問も沸いてまいりました。芸術系の世界では、「三歩下がって師の影を踏まず」の精神が生きています。封建的とか封鎖的という批判もありますが、「芸を磨く」ということは「師を仰ぐ心」なくして真の成功はありえません。師弟関係が色濃い個人レッスンではなくても、ものを教わる側の人間として、教えてくれる人に対して「仰ぐ」気持ちを持った学生が今どれだけいるのでしょうか？どのような時代になろうとも「師を敬う気持ち」は次代にも受け継いでいって欲しいと願っています。

【授業参加者の感想】 教員・学生アンケートの結果

- ・段階を追って授業が組み立てられ、スマートでわかりやすかった。
- ・時間的制約の中で基礎的力をつけるには、内容を厳選して指導することにより可能になることが実感できた。
- ・学生の実態に合わせて助言がなされていた。
- ・学生の気持ちを上手に汲み取りながら授業を進めていた。

2007年度 学部FD講演会のご報告(10月31日)

「教員養成と教員養成系学部これから—展望と課題—」

岩田 康之 先生(東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター・准教授)

今年度の学部FD講演会には、教員養成の歴史研究を専門とされ、また国の教員養成政策や東アジアを軸とした教師教育交流等にも関わっておられる東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターの岩田康之先生をお招きしました。今回の研修のねらいは「教職大学院」や「教員免許更新制」等教員養成をめぐる様々な動きの中で、今一度原点に立ち返り教員養成のあり方を考える機会をもつことにあり、岩田先生には、近年の教員養成政策の背景を明らかにする中で、今後の展望や課題についてご提案いただきました。終了後、フロアー(参加者は教員および学生計32名)から出された教職大学院や免許更新制、附属校のあり方などをめぐり活発な意見交換が行われました。

講演の概要: 近年の日本における教員養成改革は、競争的環境の中に置かれた各大学それぞれにプログラムの改善を期待する一方で、教員資質の確保・向上に際して「大学」全体が果たすべき役割を厳しく問う、という新自由主義的施策を基調としている。こうした中、教員養成系大学・学部においては、学部教育における〈体験〉的プログラムとその〈省察〉場面とをカリキュラムの中に統合的に配置する形で改善を図る一方で、2008年発足予定の「教職大学院」を契機として大学院(修士)レベルでのより実践的な「スクール・リーダー」養成を企図するなどの動きが見られる。しかしながら、それらの基本となる日本の「教師」像は、欧米流のprofessionとは異なる文化的背景を持ち、それゆえに欧米モデルの改革施策が日本に根付きにくい状況を生んでいる。今回の講演ではこうした日本の教員養成の「宿痾」を確認した上で、今後の教員養成教育と教員養成系大学・学部のあり方を考えていく上での見通しを示したい。

1. 近年の教員養成政策とその背景

免許更新制/教職大学院/学部段階の教員養成教育の充実
「開放制」の制度疲労/新自由主義的改革と競争的資金配分 など

2. 教員養成系大学・学部アイデンティティ

「大学における教員養成」の浸透度/存立基盤の危機
(少子化と学力低下のダブル・バインド)/機能論と領域論、
その今日的展開 など

3. 教員養成系大学・学部の展望と課題

地域との連携/ローカリズムの問題/適正規模について
教員養成を考えるタイムスパン など

[講演会参加者の感想] 教員・学生アンケートの結果

- ・教員養成に関わる最新の動向、情報について本質的な理解を得ることができた。
- ・山梨大学は教員養成にとって適正規模であるとのこと指摘に、希望が持て勇気づけられた。
- ・関心のあるテーマで有意義な研修であり、大変参考になった。
- ・教職大学院の課題を認識でき、学部段階での教員養成の充実という主張に共感できた。
- ・学生にとって教員養成を考えることは難しかったが、新たな視点を見つけることができた。